

むかしの高松

おおたしも・すがわいせき かみてんじんいせき
太田下・須川遺跡と上天神遺跡

—高松平野を代表する弥生時代後期の集落遺跡—



2009. 3
第 22 号

弥生土器 壺・器台
(弥生時代後期前半 2008. 5 太田下・須川遺跡出土)



遺跡周辺の空中写真(国道11号高松東道路建設前,東方向から)。

【概要】

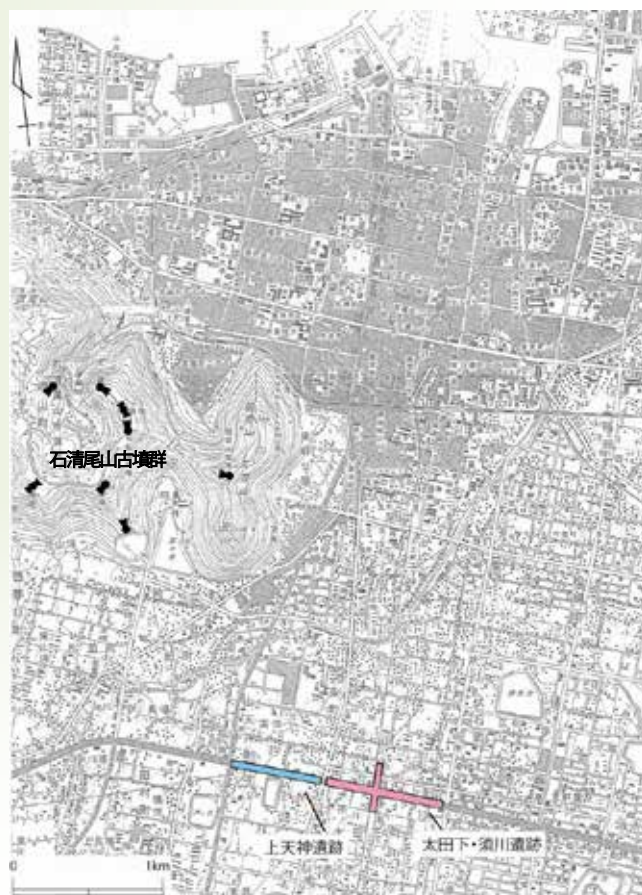
太田下・須川遺跡と上天神遺跡は、20年ほど前、高松東道路建設に伴う発掘調査で見つかった遺跡です。調査では、弥生時代後期の大規模な集落跡が確認されたほか、赤い色が着いた土器や分銅形土製品といった祭りに使われたと考えられるものが見つかり、この時期の高松平野を代表する遺跡となりました。

遺跡の立地は、積石塚として知られる石清尾山古墳群を望む地域にあり、古墳群を造営した集団との関係が注目されますが、同時に、この地域は弥生土器の製作地としても有名です。この地域で作られた弥生土器は、当地周辺のみならず、県外の地域でもしばしば見つかることが知られています。また、上天神遺跡では土器をはじめ、石器、赤い顔料(水銀朱)といった他地域から運ばれてきたものがみられます。こうした出土品に加えて、旧香東川の河口、現在の市街地まで海域であったと推定される当時の立地から地域交流の拠点を担った集落の姿が想像されています。

この後、弥生時代終末～古墳時代初頭になると、高松平野では、この地域の特色をもつ土器を使用する集落遺跡が急増することから、その母体的な存在とも考えられます。

なお、遺跡名については現在の町名によって異なっていますが、その内容は同じ集落域として考えてよいものです。

それでは、往時の調査を振り返りながら、新たな調査結果も含めて遺跡の紹介をします。



遺跡の位置図

「国土地理院発行の2万5千分1地形図(高松南部)の一部を掲載」

太田下・須川遺跡 -1989. 4. 1~1990. 4. 28 発掘調査-

現在、太田下町で高松東道路の敷地になっている場所にある遺跡で、弥生時代から江戸時代にわたる集落跡が確認されています。

この内、弥生時代後期の^{たてあなじゅうきよあと ほったてばしらたてものあと}竪穴住居跡や掘立柱建物跡が集中する居住地が、上天神遺跡に近い西側寄りで見つかっています。この居住地に接して流れる川跡からは、壺などをのせる器台や鹿の線刻を施した壺、また赤色に塗られた高杯、赤色の顔料が付いた皿形の器（把手付広片口皿^{とってつきひろかたくちざら}）が出土しており、水辺で祭りを行っていたと考えられています。これに加えて、居住地で出土した人面を表した分銅形土製品も祭りに使われた特別なものと考えられており、当時の精神世界を知る貴重な資料となっています。

その後、古墳時代中期になると、遺跡のやや東よりに方形の竪穴住居跡や掘立柱建物跡からなる集落跡がみられるようになります。これに接した溝跡からは、当時の先進的な焼物であった須恵器が多数出土しており、流通面で優れた地域であったと考えられます。



上) 遺跡の空中写真（東方向から）。



左) 分銅形土製品。下が欠けていて分銅の形にはなりませんが、小穴と突起による顔の表現がみられます。

弥生時代後期の集落・川跡



左) 竪穴住居跡。形や柱の数が一般的な住居とは異なることから、特殊な用途が考えられます。

右) 1×1間の掘立柱建物跡。



左上) 居住地に接した川跡。 左下) 川跡から土器が出土した状況。 右上) 上の竪穴住居跡と掘立柱建物跡から出土した弥生土器。



左上) 川跡から出土した把手付広片口皿の破片。内側に赤い色の顔料が付着しています。
 右上) 体部の上半に鹿のファンポイント文様を施した壺。文様は頭と胴体、そして4本の足を線刻によって表現しています。

古墳時代中期の集落跡



左最上) 建て替えられた2×2間の総柱建物跡と方形竪穴住居跡。
 左中上) 1×2間の掘立柱建物跡と2×2間の総柱建物跡。
 左中下) 集落の中心一族の家屋と考えられている竪穴住居跡の遺物出土状況。
 左最下) 上の竪穴住居跡から出土した食器と貯蔵具で、須恵器と土師器があります。
 右上) 木樋が設置された灌漑用の水路網。 右中) 右上の水路から出土した須恵器。
 左中) 同水路から出土した須恵器で、樽の形をしたハソウ。 中下) 竪穴住居跡から出土した装身具。左が滑石製、右が琥珀製の勾玉。 右下) 滑石製の紡錘車。

太田下・須川遺跡 -2008. 5. 1~6. 17 発掘調査-

昨年、高松東道路と交差する線路の高架東側において、再び太田下・須川遺跡が発掘されることになりました。弥生時代後期の生活の跡については、まばらな状況であったことから、集落の中心からは外れた場所にあたると考えられます。

このような地点にあつて、注目される井戸跡が見つかりました。井戸跡は円形で、大きさは直径1.5m程、深さは1.3m程のもので、湧水のある礫の地層を掘り抜いて造られていました。この井戸跡の中からは多数の遺物が見つかりますが、遺物を含んだ堆積の一番底からは、器台とセットになるような壺が半分に割られて見つかるなど廃棄された状態がよく分かるものでした。

この井戸跡で特徴的なところは、文様で飾られた大形の器台や穴が開けられた実用性のない土器がみられること、土器の付着物から周囲で赤い顔料（水銀朱）が使用されたと推定されること、また井戸を埋めた土に多量の小石が混入されていた点にあります。このような特徴は墓域で見られる祭祀の跡とよく似通っていますが、この場所について考えてみると、土地や水に関する祭祀を想像することができます。一般的に、弥生時代の井戸跡が見つかることは県内では少なく、この点からも日常生活や農業用水の確保といった目的のものではなく、特殊な用途の施設であったと考えられます。



上) 2008年度の太田下・須川遺跡調査風景。

弥生時代後期の井戸跡



左上と左中) 井戸跡の遺物出土状況。上の方では、土器の破片や小石が目立ちましたが、下の方になると形を留めた土器が多く見られました。

右上) 遺物が詰まった堆積層と、その下で出土した器台と壺。

左下) 井戸跡の断面。調査時にも掘り抜かれた礫からは、かなりの湧水が見られました。

右下) 廃棄された器台・壺の出土状況。器台の下になっている壺は、縦に割られて半身になっていました。



井戸跡の出土品



- 左上) 井戸跡出土の主要な土器。壺・甕^{かめ}・高杯・器台などがあります。
- 右上) 穴が開けられ実用品でなくなった土器。穴の形には、大きく不整形なものと小さく整った円形のものがあります。
- 左中) 内側に水銀朱が付いた大丹塗の破片。容器として用いられたのであれば、約9kgの貯蔵量が推定されます。
- 左下) 把手付広片口皿の破片。その一部からは科学分析で水銀が検出されています。
- 右中) 器台に見られる装飾。長方形や円形をした窓のような穴と線や点描で幾何学的な文様が施されています。
- 右下) サヌカイト製の石庖丁（稲穂を摘む道具）。出土品の中で1点のみの石器です。

上天神遺跡 —1987. 11. 7~1992. 7. 31 発掘調査—

上天神遺跡は、上天神町で国道193号線より東側の高松東道路の敷地に所在した遺跡です。旧香東川の東岸に位置しており、調査ではこれより取水する大規模な灌漑水路網が2群、発掘調査において確認されています。この水路網は、弥生時代前期後半から弥生時代末期に至るまで維持されたと考えられており、その規模からも1つの集落の枠や存続時期を超えた灌漑施設の重要性を物語るようです。

遺跡の中で集落が確認されたのは中央部と西部にある周囲より地面が高くなっているところで、弥生時代後期初頭という短い期間に営まれたものです。そして、中央部では密集した竪穴住居跡とこれを取り巻くように掘立柱建物跡群が見られ、さらに西部でも竪穴住居跡と掘立柱建物跡がセットになる様子が分かるもので、集落の構造を良好に読み取ることができます。

周囲の溝跡からは、この集落で用いられた土器が多量に廃棄されて見つかっています。出土した土器の約9割が、近くで製作された在地産のものです。また水銀朱の原産地でもある阿波地方の土器や石器、あるいは吉備地方、西部瀬戸内地方から運ばれた土器は、当時の地域交流を示すものとなっています。このほか、太田下・須川遺跡でもみられた把手付広片口皿など水銀朱が付着した土器が出土しており、特別な祭祀とともに朱の精製作業などの手工業が想定されています。



上) 集落跡の空中写真（西方向から）。
下) 赤彩装飾高杯。

弥生時代後期の集落跡



- 左上) 密集する竪穴住居跡および掘立柱建物跡などの集落跡。
- 右上) 掘立柱建物跡群の全景。
- 左下) 掘立柱建物跡群に隣接する溝跡。廃棄された土器の破片で、溝の中は隙間なく埋まっています。
- 右下) 上とは別の掘立柱建物跡群に接した溝跡出土の弥生土器。



左上) 近畿地方の土器を模倣した在産土器。忠実に形や製作の技法をまねたもので、近畿地方から来た人たちが土器を作ったと推定されています。

中上) 吉備地方南部から運ばれた土器。

右上) 阿波地方から運ばれた土器。

左下) 西部瀬戸内地方から運ばれた土器。

右下) 結晶片岩製の石斧、石庖丁などの石器。結晶片岩の産地としては、徳島県の吉野川流域が知られています。

下) 把手付広片口皿の上面、側面および底面。フライパンのような形で、浅い体部に幅の広い注ぎ口と把手が付いたものです。

—編集後記—

今回、約20年ぶりに太田下・須川遺跡を発掘する機会を得ました。この遺跡の調査では、弥生土器や赤い顔料（水銀朱）が印象に残りました。この地域の弥生土器は、高松の土器と呼べるほど特色もあったのではないかと改めて思いました。また朱については、主に古墳などの墓で使われるものですが、集落でもこんなにあるものと驚きました。今回の調査は、弥生時代の大集落の一部でしたが、得ることができた貴重な成果を生かして、今後とも調査を続けていきたいと思っています。(T.O)



むかしの高松

第22号 2009.3.31

・編集発行 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
Tel. 087-839-2660

<http://www.city.takanatsu.kagawa.jp/886.htm>

・資料提供 香川県埋蔵文化財センター